文化芸術のなかで
今も家紋として生き続ける

# 其阿彌家〔尾道〕

今をさかのぼること約千三百年前の天平時代、備後鍛冶の初代正家〈初代宗家〉が、
〝人から尊敬される一芸に秀でる〟という精神を、刀鍛冶に求めて以来、今なお尾道に続く旧家で、鎌倉時代に「三原鍛冶の祖」と謳われた刀匠、六代正家〈六代宗家〉を中興の祖としています。
その六代正家が初代の精神を家訓にすべく、自らが作り上げた御札切りの小刀を、一三一三年、正和二年四月十五日、尾道の常称寺創建に来られていた時宗の二祖真教上人に献上したところ、その出来栄えがあまりに見事であったことから、一芸に秀でた者の証しとなる【其阿彌】の号〈法名〉を賜りました。
其阿彌の其阿は、他阿（のちの、法主）に次ぐ地位を表し、それに一芸に秀でた者に与えられる阿彌号をつけたものです。
現在、六代正家が作った太刀が、天皇家の宝物「御物」として、皇居の三の丸尚蔵館に収蔵されています。
六代正家〈右衛門尉〉の長男正廣〈左衛門尉〉は、尾道の艮神社前に住んで其阿彌と称し、二男政家〈左京亮〉は三原に、三男正信は木梨に住み、四男正宗は備中（岡山）に移り、五男正利〈一乗〉は、草戸（福山）で法華鍛冶になり、養子の六男増守は尾道で、それぞれが独自の流派を形成し、さらに、各時代の宗家の直弟子の五阿彌や辰房などの一派も誕生し、古三原と呼ばれた六代正家、七代正廣〈七代宗家〉が活躍した鎌倉時代末期から、室町時代を経て安土桃山時代に至るまで、尾道を中心に全盛期を迎えました。
江戸時代中期になると盛んに鐔を作り、代表的なものとして、武鑑文透鐔 銘 其阿弥があります。
明治になると、其阿彌鍛冶屋〈屋号〉の其阿彌が其阿彌姓となり、初代正家の精神が六代正家そして、七代正廣を祖とする秀文までの「おのみちのごあみ」〔当其阿彌家の別名〕に代々受け継がれて来ました。
私の父がお墓の土台部分に刻んである家紋を見て、「これは、ただの家紋ではない」とつぶやいていた【丸に並び杵】は、六代正家が、当時、初代の墓がすでに土に還っていたので、初代の遺徳を永遠に残すため初代を表すものとして、自らの姿を象った杵を使って家紋を作ったと伝えられています。
かつて、華やかなりし時代の我が家の語り草として、祖母がよく言っていました、
「昔の其阿彌は凄かった、尾道の町を肩で風切って歩いていた」。

其阿彌家の家紋【丸に並び杵】

正家
二十八代宗家　其阿彌秀文©

平成十三年（二〇〇一年）一月一日
この話は、史実をもとにした物語です。
諸説は多々ありますが、御了承下さい。

宗家の許可なく無断複写・転載を禁ず。

文化庁登録　第一八三〇七号